

E-Mail Penpal の報告

平井 孝夫

1998年3月15日

この報告は昨春から始めた E-Mail Penpal の活動報告です。この活動を始めた動機、活動内容、生徒の感想に加え、E-Mail の仕組みなども触れてあります。一事例として、今後展開されると思われる inter-net 環境下での教育の参考資料になれば幸いです。また、最後にアンケートについてのお願ひがあります。

なお、この報告を書くにあたり、英語科 三橋先生、理科 下田先生 吉見先生 宮崎先生の協力を頂きました。この場をかりて、御礼申し上げます。

1 はじめに

体を動かすことが好きな私がひとつ不得手とするものがある。それは水泳である。都の教員採用試験に合格し最初の赴任先が伊豆七島の新島高校と決まったとき正直言って真青になった。せっかく島に就くのだからその土地ならではのことをしたい。がしかし、カナヅチである。カナヅチであることが生徒にばれたらどうしよう……。若さゆえ、それならと思い、千歳烏山のスイミングスクールの短期講習に参加したのは春休み前の3月頃だったと記憶している。

新島高校に着任して3年目の夏休み、校内のプールで体育の先生や警備員の方から水泳の特訓を受けやると25mぐらいを泳ぎきることができるようになった。そんな折り、同僚から海水浴に誘われ、いやいや海に入った。ところが、透き通った大海に入り、こんなすばらしい世界があるのかとショックを受けた。それ以前、地上の生活しかしていなかった私(?)は海に入り、魚と戯れるとはいかないまでも、シュノーケルを付け魚を追い、海の中からキラキラ光る水面を水中から見た時の別世界にいるような感覚は今でも忘れない。

inter-net の世界に私が取付かれたのもこの感激に近いものがある。それ以前 computer は数学とは無関係、computer はナンセンスと自ら遠ざかっていたのであるが、高校時代の友人から「これはやってみると面白いし、価値がある」と inter-net の話を聞き、やり始めた。ご多分にもれず、アダルト向きの home-page にも立ち寄りもしたが、inter-net で繰り広げられる空間の広さ、しかし、地理的な距離を感じさせない。私の近くにはいくらでも人がおり、情報があるという事を知ったとき、正直なところ、ここには新しい Topological Space があると感じた。こんな感激を生徒にと思って始めたのが E-mail Penpal である。inter-net で繰り広げられる新しい事象に、コミュニケーションが存在するのかという疑問を持ちつつ、この1年間の E-mail Penpal の活動報告をしたい。

2 呼びかけと5人の生徒の応募

5月に次のような呼びかけのプリントを各学年の各教室に掲示させていただいた。その際、個人の privacy, security の問題が指摘され、職員会議で簡単な趣旨説明とそのような問題について担当者として十分留意する事を前提に募集、実施が了承された。

E-MAIL "PEN PAL"

WANTED !!

To all students, hoping to change their lives.

I exchange electric mail with foreigners ; Philipino, Thai, American, and Canadian, supported by Mr. Mistubishi and Mr. Nakamura.

Electric mail is called E-Mail and travels all over the world using inter-net service.

The foreign pen pals are eager to know about your school life in Japan.

Is there anyone who wants to exchange E-Mail with a foreigner, to communicate with him/her frankly and, at the same time, to study a bit in English ?

If you had an interest in this, please come to me as soon as possible.

Takao Hirai (the department of mathematics)

May 30 , 1997

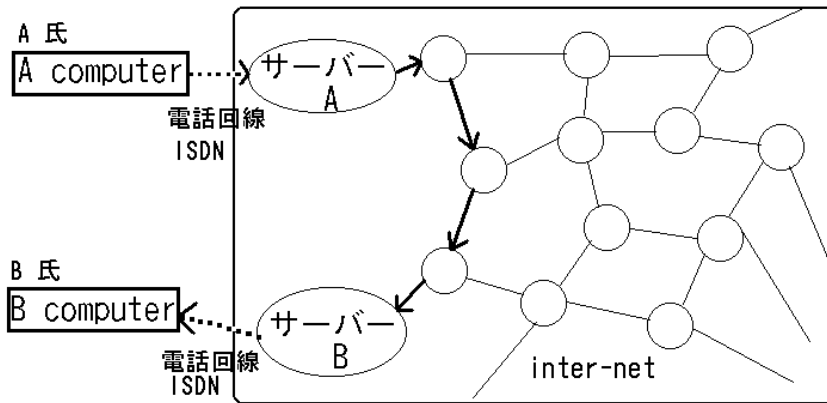
(This sheet is good for one week and it will go out of sight automatically after one week.)

この募集に対し、1年生1人(Te さん)、2年生3人(Su さん、To さん、Sa さん)、3年生1人(Ki さん)計5人の女子生徒の応募があった。E-mail Penpal の趣旨と概要の説明をした後、自己紹介文を英文で書くことからいよいよスタートした。Sa さんは、自宅に computer があり、自分でやろうと思えばやれる環境にあるということで参加を取りやめた。

3 E-mail のしくみ

次図のサーバーと呼ばれるものも computer であるが、ファイル、プリンター、通信などの特別の機能を持ったものである。A 氏 (A computer) から B 氏 (B computer) へ E-mail を送るには、A、B 両氏がサーバー A、B をそれぞれ使えるように契約をしておき、A、B 両氏が id に相当する E-mail の address を持っていることが前提である。

A 氏は自分の書いた mail をサーバー A に送信すると、サーバー A が送付先の address を読み、いくつかのサーバーを経由してサーバー B に mail を送信する。この段階では mail がサーバー B に届いただけで、B 氏は mail が来ていることは分からない。(郵便でいうと郵便局 B に局止めという感じ)でも、B 氏がサーバー B にアクセスすればその mail の存在を認識し、mail が B computer に送られ、無事 mail が B 氏に届くのである。サーバー A からサーバー B へ mail が送信されるとき、いくつかのサーバーを通るが、サーバーで構築される世界 (inter-net) のその時の状況により、通り道はいつも同じとは限らない。



4 E-mail 交換の実際

4.1 POETS Electric Penpals について

私自身、関西にある Notre Dame Women's College の POETS Electric Penpals という Mailing List に加盟している（以後、POETS）。いわゆる海外文通の斡旋組織の inter-net 版である。（一般的には Mailing List はもう少し違う意味で使われている）

POETS Electric Penpals

POETS Electronic Penpals is a free internet mailing list for young people who want to exchange e-mail with others in English. Our purpose is to promote friendship among young people.

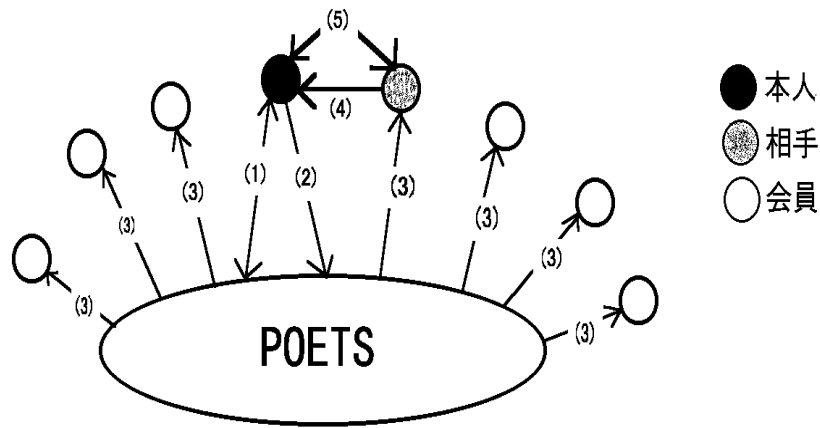
Participants introduce themselves by sending e-mail to the mailing list. Most people send only one message to the mailing list. This is not a discussion list.

How to participate

1. First, learn how to participate and how to quit.
2. Send your subscription request according to the introductions. After you subscribe, you will receive all messages sent to Penpals. Most participants are between 15 and 23 years old.
3. After you join the list, introduce yourself to everyone. Send a short self-introduction, describing yourself and your hobbies or other interests. Your self-introduction will be sent automatically to all members of the list.

POETS に登録しているメンバーが何人いるか、どこに住んでいるかまったく分からない。また、登録、脱退は自由である。登録した（１）後、“self-introduction” という mail を POETS に送ると（２）、登録しているメンバー全員にその mail が配信される（３）。そして、会員の誰かが返事を私のところに送ってくれば（４）、その人と mail の交換が始まる（５）という仕組みになっている。mail の交換が始まれば POETS を介さず当人同士で mail の交換をする。

当然、私のところにも週 1 ～ 2 通の割合で “self-introduction” という新規会員の mail が POETS を介して今でも届いている。



● 本人
 ● 相手
 ○ 会員

4.2 私がしたこと

学校の computer で生徒が書いた "self-introduction" を生徒自身が入力して floppy disk に記録し、私がそれを自宅に持ちかえり、さっそく POETS に送信した。数日後、各生徒に返事が届いて個人的な E-mail の交換が始まった。

以後、返事がくれば floppy disk を媒介に print out して mail を生徒の手渡し、その返事を生徒が書いて floppy disk に記録して私の computer から送信する、その繰り返しをしただけである。

4.3 mail の交換相手

たくさんの返事がきたら大変だと思っていたものの、実際には数通の返事しか来なかった。

4.3.1 Te さんの相手

相手は Singapore の技術者らしい。自分で Home Page をもっている。

Home Page とは

自分が契約している inter-net 接続業者のサーバーに企業、団体、個人等が自由に宣伝、主張等の情報表示ができるもの。この Home Page は、Browser というソフトを使って誰でも見ることができる。

企業は営業案内、商品紹介、求人情報等を、大学は学部案内、入試情報、公開講座等の案内を、個人は自分の趣味などに関することを Home Page に載せている。いくつかの都立高校でも既に Home Page を開いており、学校案内や部活動などの情報表示を行っている。

私もこの Home Page を見に行ったが、Mail の相手の人は技術者であると同時にデザイナーのようで、Computer Graphics の素敵なポスターがあった。また、クリスマスには、カードが送られてきた。年齢不詳。

4.3.2 Su さんの相手

2 通の返事が来たがそのうちの一人は 24 歳の programmer で、もう一人は日本の大学 3 年生であった。

4.3.3 To さんの相手

38 歳の韓国人。日本の学生と是非 E-mail 交換したい返事を頂いた。

4.3.4 Ki さんの相手

既に中学時代から文通をしているアメリカに住む友人がいて、その人が E-mail をしていることが分かり、その友人と頻りに E-mail 交換をしていた。(電話と同じ感覚で E-mail を日常的に使っている様子)また、Canada に住む同世代の女子学生とも e-mail の交換が成立。実は、この Canada の学生は今年の夏、日本にやって来た。残念ながら、Ki さんと会う時間がなかったようであるが、会えれば、二人とも感激したろうに …。

5 生徒の感想

5.1 Te さん

私は、最初相手の返事が早くてとまどいを感じたことがありました。まだ、すらすらと自分の考えを英語に変えられるわけでもないし、難しい表現の英語を訳すだけでも大変でした。

この1年で少しは英語の力がついたかなと思っています。それに相手の国のこともいろいろと分かって楽しく、おもしろく感じています。

しかし、もっと英語を早くマスターしたいという気持ちにかられ、あせってしまうこともあります。これからは、大学のことや、将来のこと、やりたい事など大変なことをこなしていかなければいけない中で続けられるか心配のところもありますが、これも1つの経験であり、国際的なものの一步として取り組んでいこうと考えています。

5.2 Ki さん

私がやっていた E-mail Penpal というものは郵便のやり取りとはまた違った面白味があったといえる。

一つは海外郵便では自分の手紙が相手に届くまで少なくとも一週間はかかるが、E-mail では日数ではなく分単位と行った、わずかな時間で届く点。

二つめは、E-mail Penpal を始めたことで、自分の見知らぬ土地に友達ができたといい点。

学校で募集のプリントを見て参加し、すぐに同じ年の女の子と E-mail での文通が始まった。夏休みにも学校へ何回か行き E-mail を送った。前から inter-net をやっていた私の文通友達とも E-mail を相互に送りはじめた。私は三年生であるので、受験のために長い時間を使うことができなかったが、そのような中でも、このやり取りでは海外にいる友人達が身近に感じられた。今回、私がやっていた E-mail は、先生が間に入っている点でプライバシーのことが問題になると思うが、私にとっては何の支障もなかった。というのは、私が手紙と E-mail で書く内容を区別していたからである。

一年間この活動ができて本当に良かったと思う。英語の力を伸ばすことやパソコンの基本操作を覚えることができた。この学校にもパソコンや inter-net に興味を抱く生徒はまだいると思う。来年度からは、もっと大きな存在になってほしいと思う。私の進路先にも幸運なことにパソコンがある。また自分の E-mail アドレスをもらい、再び E-mail をはじめようと思っている。

6 終わりに

inter-net を含め、computer に関わりはじめて数年、駆け出しの状態なのでまだどのような問題があるのかまとめられていません。そこで、E-mail Penpal での問題点、今、私が感じていることなどを羅列的であるが書いてみたい。

6.1 呼びかけに応じた生徒が5人と少なかったのは何故か、あるいは、この人数は妥当と判断するか

- E-mail の使い方は後述するようにいろいろあるが、少なくとも POETS での E-mail は文通である。手紙を書くことが不得手なら興味を示さないであろう。しかし、それを乗り越える楽しさを体験すればまた変化するかもしれない。これは鶏と卵の関係。

- 英文であることの抵抗感

勿論日本語の mail の交換は可能であるが、それには相手が日本語が分かり、mail というデータを日本語として理解できるソフトを持っていることが必要である。Suさんは日本の大学生と日本語で mail の交換をしていた。しかし、E-mail を含む inter-net の世界では、英語が主流である。では、何故そうなのか、その理由のひとつは、

インターネットは、いつどうして始まったのか。アメリカの国防省がアメリカ国内に展開したコンピューターネットワーク (ARPANET) が、その原点である。各コンピューターがそれぞれ自由に連絡するという、いわば情報のやりとりの分散型ネットワークであったが、同時に中央からの情報や指令を全端末に伝える集権型にもなる統合型のネットワークでもあった。その設立の大きな動機は核戦争である。核戦争によって、中央のコンピューターが破壊されたとしても、インターネットのネットワークの各端末はなお自由に通信できる。最悪の非常事態にあっても生き残りの端末は、それぞれ情報を相互に連絡することができるというシステムを、アメリカ国防省は考えだしたのである。1969年のことである。

— 「インターネットの虚像」(星野芳郎) より—

ともあれ、最初の人数はこんなもので、継続していく中で口コミなどで E-mail に興味を持つ生徒が出てくるかもしれない。

6.2 継続性の問題について

必ずしも、E-mail が継続的に交換されるわけではない。実は、Suさん、Toさんの mail 交換は2学期頃に途絶えてしまった。このような事は私自身も何度となく経験している。

- New Zealand の先生とのケース

私自身が E-mail を始めた頃、New Zealand の高校に直接 mail を送り、その高校の数学の教員と E-mail の交換が始まった。しかし、数度の E-mail 交換の後、全然返事が来なくなった。私の思考や表現方法が硬かったのか、その理由はいまだ分からない。

- 高校生とのケース

多分アメリカに住んでいると思うが、Lynda という17歳の高校生との E-mail 交換も数度で途絶えた。これは年齢差による話題の不一致と考えている(?)。

mail 交換しているもの同士が、電話のような感覚で他愛ないおしゃべりを楽しもうとしているのか、私のように異文化について情報を得たいと考えているのか、目的や相性などが問題になる。

6.3 生徒の security の問題について

実は、生徒への返事の中には、生徒の写真がほしい、住所を教えてほしいというものがあった。これについては生徒と相談し、もう少し mail の交換が進んでから返事を書くことで対応した。その後、何度か催促があったが、返事が来なくなってしまった。個人情報の扱いは inter-net を介している限り十分注意しなければと感じた。

私がこの1年間携わった E-mail Penpal は、利害関係のない単なる " Penpal " であった。

実社会では、企業、官庁、教育機関などの間で様々な形で E-mail が使われている。一企業の中では intra-net とよばれる computer のネットワークを組み、部、課等の相互間で情報交換、報告、連絡などに使われているし、社員が出先から E-mail で報告するようなことも行われているらしい。

そこで、もう少し話を広げて、inter-net について考えていくときの指標を与えるものについて、

6.4 E-mail を含め inter-net について — 最近の書籍から —

6.4.1 立花隆氏の場合

立花隆氏はその著書「インターネットはグローバル・ブレイン」の中で global brain という key word を提示している。ピーター・ラッセルの「グローバル・ブレイン」という本を紹介した後、彼はいう

まず人類を広大な神経圏ととらえてみる。するとそれは全地球的な脳みたいなもの、つまりグローバル・ブレインといえるのではないかとことです。そのグローバル・ブレインの中で、個人個人は、いわば一つのニューロンのような役割を果たしているというのが、彼（ピーター・ラッセル）の基本的な考え方です。（中略）

グローバル・ブレインの考え方をさらに発展させると、たくさん人間が集まって社会をつくり、その社会構造をどんどん複雑化させてきたその構造を、ちょうど、神経細胞がたくさん集まって神経回路を作り、それがまた多数結合されて神経回路網になっていく過程になぞらえることができる。

確かに inter-net の捉え方としては、興味あるものである。また、この本の目次には次のようなものが並んでいる。（抜粋）

- インターネットはグローバル・ブレイン
- インターネットはどこでもドア
 - 関連情報が充実している巨大ニュース・リンク
 - 仮想ミュージアムで世界中の絵画を鑑賞する
 - 安全保障関係も外交も。進む情報公開
 - 日本のインターネット史に時代を画した「ナホトカ」号重油流出事故
 - 万博反対運動から沖縄独立論まで、「発信」始める個人
- インターネットは社会をどのように変えるのか
 - 日本を変える大衆参加型メディア
 - 21世紀型ライフスタイルをつくる原動力

これらから分かるように、立花氏は inter-net について非常に楽観的な立場に立つ。

6.4.2 星野芳郎氏の場合

一方、前述の星野芳郎氏はその情報の公開の意味、信憑性を問題にする。アメリカでは情報公開が進んでいると言っても、「国民にとって最も大切な情報は、官僚にとってもきわめて責任の重い情報であるから、アメリカ政府が今後もそれ（行政情報）を容易に公開するはずがない」と述べ、アメリカ政府が、北ベトナムが攻撃をしかけてきたとしてベトナム戦争全面介入に踏み切ったが、実はそれ以前に北ベトナムへの大規模な爆撃を決定していたという極秘にされていた政府情報をニューヨークタイムスが暴露したことを例証にあげている。

その著書「インターネットの虚像」の中で、

官僚はコンピューターを駆使して、いよいよ巧妙に情報を独占し、どうでもよいような情報だけを大量に流すに違いない。国民の生き死にに関わる情報こそ独占し嘘をつくという、かれらの人間像が変わるなどという保証は何処にもないではないか。（中略）

コンピューターの本質的な特性を考えるならば、情報操作による破壊行為は、技術的にも防止することはできないといわざるを得ない。

といい、computer は「格段に複雑な加工が可能であり、嘘の情報が inter-net を通じて超高速で地球的規模で走り回る」といっている。さらに、彼は教育と computer の関連の中で

強いてインターネットを使わなくてもよいような授業にことさら使ってみせ、いかにも時代の先端をいくようなポーズをとる風景は見苦しい。(中略)

コンピューター信仰の落とし穴の最たるものは、人々がそれによる人間と人間との信頼関係の切断に鈍感になることである。

示唆に富む言葉であり、肝に銘じておきたい。

6.4.3 私は …

子供達がファミコンなどにふれ、小・中学校の授業の中で computer が使われ始めている。大人のようにキーボードやマウスに戸惑うこともなく近い将来、大方の生徒が computer を扱っていくであろう。また、技術的進歩により電話・TV・電卓と同じように道具として computer を使い、inter-net も活用されていくだろう。

書店では inter-net の雑誌が多く並んでいる。「サルでもできる …」などという書名を見ると何かやらなければ、理解できなければこの時代に乗り遅れてしまうような印象を受ける。(このような脅迫の手口は戦後の教育の底流に流れており、ある意味では教育レベルの向上に寄与しているが自由な発想が日本に生まれにくい土壌を作り出していると思う)このような状況の中で、我々はどのように inter-net とつき合っていけばよいのだろうか。

- ・ 私自身は最初に書いたようにまずこの新しい世界に対峙したいと思う。現実社会の中で動いている inter-net なのであるから、理論的、抽象的なことではなく、まず自分でやってみることが大切であると思う。
- ・ 次にこの inter-net の世界にある大量の情報を教育現場でどのように活用できるか模索していきたい。どの教科でもその活用方法はいくらかもあると考えられる。
- ・ 更に、読み、書き、算盤と昔から言われてきたが、これに加え、話す、聴くということが今必要であると思う。自己表現すること、自分が必要とする情報を自ら収集する方法の体得である。その一つの方法として inter-net が使えるのではないかと考えている。
- ・ 6.2 で述べたように、E-mail の交換が途絶えたとき、本当に相手の人が実在していたのだろうかと感じた。もしかすると、私はただ仮想空間を彷徨っていたのではないか。TV、ラジオ、書籍とは違う双方向のコミュニケーションとして、我々は日常的な会話、電話、手紙などと何が違うのか、その情報量の大きさ、高速性は十分体験できるが、そこで得た情報の実態は何なのか考えざらうを得ない。そこで、情報の意味も考えていきたい。

以上の問題に加え、教育現場に inter-net が導入されるとなるとその社会的な意味が問題となってくる。

そして、私としては

- ・ 情報の信頼度、またそれを判断する能力が身に付けられるか
- ・ computer によって、我々が得るものは何か、失うものは何か
- ・ inter-net によって我々自身の存在が否定されることはないのか

等の視点を持ち、泳ぐことと、inter-net を含む computer を使うこととを比較しながら、自分の実感を大切にやっていきたい。相手を知らなければ何も得られないと思うから。

7 アンケートについて

次回の職員会議で了解が得られれば、その場でアンケートを実施したいと考えています。

アンケートの趣旨は、いずれ数年後には各学校に inter-net が接続され、我々も活用できるようになるだろうし、教育手段のひとつの方法として教育現場に入ってくると思われます。そのような状況予想の下、我々はどのような準備をしていく必要があるのか検討するため、実情を把握したいからです。また、このアンケートの集計、分析、回答は、はじめに書きました4人の先生方と行う予定です。より多くの方のご協力をお願いします。

性別、職種、年代によって個人を特定することが可能ですが、アンケートの趣旨をご理解いただき御回答下さい。決してご迷惑をかけることのないようにします。質問5の感想、質問を含め、後日何らかの形で集計結果を報告したいと
思います。アンケート用紙は3月25日(水)の昼までに平井のメールボックスに入れて下さい。宜しくお願いします。

- ・性別 (1)女 (2)男 ・職種 (1)事務職 (2)教育職
・年代 (1)20代 (2)30代 (3)40代 (4)50代 (5)60代

質問1 自宅に computer に関する機器がありますか(複数回答可)
(1)いいえ (2)パソコン (3)ワープロ (4)ファミコン

質問2 今までに、inter-net の経験がありますか
(1)いいえ (2)はい

質問3 (質問2で(1)いいえと答えた方へ) もし、機会があればあなた自身 inter-net をやってみたいですか
(1)是非やってみたい。あるいは、現在検討中
(2)教えてくれる人がいればやってみたい
(3)あまり興味がないのでやってみたいとは思わない
(4)その他の理由でやってみたいとは思わない
(5)inter-net 自身の中身が分からないので判断しかねる

質問3 (質問2で(2)はいと答えた方へ) inter-net についてどのような印象をお持ちですか。具体的に御自由にお書き下さい。

質問4 いずれ、inter-net が教育現場に導入され、教育手段のひとつとして活用されると思いますか
(1)活用されると思う
(2)導入されても活用するのは難しいと思う
(3)活用する必要はないと思う
(3)判断しかねる

質問5 最後に、情報を得る手段として我々は書籍、新聞、TV などを利用しています。それらと比べながら、inter-net や computer について考えていること、感じていること、また、質問などありましたら、御自由にお書き下さい

ご協力ありがとうございました(1998 / 3 実施)